

書評 “アリエス『<子供>の誕生-アンシャン・レジム期の子供と家族生活』”

高橋孝枝

0. はじめに

フランスの歴史学者であるフィリップ・アリエスが著書『<子供>の誕生』を書いたのは1960年のことである。この書で子供や家族に対する人々の意識ですら歴史的には変化することをアリエスが示したことは、「家族やこどもはこういうものである」という固定観念に縛られて研究対象としての「家族」に関心の薄かったそれまでのヨーロッパの歴史学に重要な視点を投じることとなった。

この書評では、これまでのアリエスへの評価を見ていき、そして新たな再評価の試みをしてみたいと思う。まず、要約から始めようと思う。

1. 要約

第一部「子供期へのまなざし」では、『<子供>の誕生』においてもっとも有名な命題である「子供期の発見」が記されている。人生の諸時期には各時代によって特別に重視される時期があり、それは人口学的な関係に依存する。十七世紀に特別重視されたのは「若者期」であり、十九世紀は「子供期」、二十世紀は「青年期」である。(Aries [1960=1980:34]) そこでまずアリエスは、子供の図像記述の歴史的变化に着目して子供に対する人々の意識を描く。子供だけが描かれる肖像画や、子供を中心とする構図によって描かれる家族の肖像画がありふれたものになっていくのは十七世紀のことであり、それまでの絵画、例えば、ロマネスク様式の世界では、十三世紀の末葉までは、特有の表現によって特徴づけられた子供の姿は見られず、背丈の低い大人として描かれるだけであった。(Aries [1960=1980:35, 47.]) また子供の服装にも着目する。中世には幼児は産衣をはずされると、すぐに、自分の属する身分の他の男性や女性と同じ服を着せられていた。しかしながら十七世紀になると、少なくとも上流階級の子供は大人と同じ服装はさせられていなく、大人の衣服とは区別される子供の時期に特有の服装があらわれるようになる。しかし衣裳の考証の範囲における子供期の特殊化は少年のみに限定され、またブルジョワないし貴族の家庭にのみ保持されたものであった。少女たちはその後も長期にわたり伝統的な生活様式のうちにとどまり、大人の女性と区別なしに一緒にされていた。また庶民の子供たちは服装の上でも、労働の上でも、遊びの上でも、子供と大人を分離することのなかった古い生活様式を保ち続けた。(Aries [1960=1980:50-51, 60.]) 次に、遊びの歴史にアリエスは目を向ける。160

1年生まれのルイ十三世の時代においては、今日見られるような子供用の遊びと大人が行う遊びの間に厳密な区別は存在していなかったように思われ、同じ遊びが、大人と子供の双方に共通であったのである。(Aries [1960=1980:65]) 同じくルイ十三世の子供時代を例に挙げて、現代のモラルでは大人が子供を前にして性に関係したあらゆるほのめかし、ことに猥談を口にするにはいましめられるが、当時はそういった感覚は欠如していたことを示している。それが十七世紀になると子供は無垢であるという観念がモラリストや道徳的・教育的文献などにより押しつけられ、それを保護するための教育の必要性が叫ばれるようになる。(Aries [1960=1980:96,106.])

第一部のまとめとして、十六世紀・十七世紀になって、家庭環境の中から子供への可愛がりという意識、モラリストならびに教育家からは可愛がりを否定し、不確かな理性を持つ子供たちを理性を持った人間に育て上げようという意識、といった二つのまなざしが生まれたとアリエスは述べる。十八世紀になるとこうして旧来の二つの要素が、衛生と身体的健康への配慮という新たな要素に結びつけられて、家庭の中にみとめられるようになった。こうして、子供期という観念が生まれた。このことはそれまで子供たちが無視され、見捨てられ、もしくは軽蔑されていたことを意味しない。子供期という観念は、子供に対する愛情のことではなく、子供に固有な性格、すなわち本質的に子供を大人ばかりか少年からも区別するあの特殊性への意識なのである。(Aries [1960=1980:122,128.])

第二部のテーマは「学校での生活」である。中世の学校における教育方法上の特色には難易性にしたがって学業上の科目を配列するという段階化された現在のようプログラム欠如や、反復による教育(筆写書物の稀少さゆえに、主として記憶に頼ることが必要とされ、くどくどと反復し同一教科を幾度も聴講して習得することを余儀なくされた)である。こういった特色から、中世の学校においては同一の聴衆のうちに、あらゆる年齢の生徒、学生と一緒にまざっていた。よって学校に入ったその時から、子供は直ちに大人の世界に入るのである。今日の私たちが年齢を非常に区分しようとするのと比較すると、相違する人びとが混然と一緒であったという事実は、当時の人びとが年齢の現象に無関心であったという意識の現れであるだろう。(Aries [1960=1980:145,147,149.])そしてその転機のきっかけになるのが、聖職者たちによる彼らの給費生のための学寮である。学寮は放縦さや無規律への嫌悪・反発から生れ、生徒たちを大人の社会から分離し、かれらをその身分に特有の規律に従わせることになっていった。そして十九世紀の後半になると寮制度は衰退していき、そこに帰属させていた生徒たちの精神的・道徳的な枠組をつくる役割は家庭に置きかわり、その結果、子供たちは以前の時代よりももっと長い期間を家庭で過ごすようになる。(Aries [1960=1980:150-151,268-269.])そして教育方法においても、まず十五世紀に生徒の知識の程度ごとにくいつかの集団に分割されるようになり、次にその集団に固有の教師がつけられ、さいごに諸学級とその教師たちを各々の個別の部屋へと隔てた。このような分化を経て近世の学級は誕生した。この分化は段階化されたプログラムや子供と大人を区別する教育の方向に沿ったものであった。しかし、この分化は能力の発達程度に人びとの注意が向けられたことによってなされたものであり、年齢ごとに分離するという配慮が、理論的に認識され主張されるのはもっと後になってのことである。(Aries [196

0 = 1980 : 179 - 180.]) 生徒たちの年齢の区分は先述の学級の編成過程に対応してなされるようになった。まず十八世紀に、早熟した子供たちの受け入れを拒否するか、最下級の学級にふみとどませるか、あるいは同じ学級を反復して過ごさせるかするようになった。十九世紀になると十二、三歳ぐらいの少年と、青春期ないし青年期の生徒の区分がブルジョワジーのうちでなされるようになってくる。また年齢による区分だけでなく十八世紀においては、ひとつは民衆のため、もうひとつはブルジョワと貴族身分のために、二つの教育が社会的に分化してくる。つまり金持ちと貧民とが隔てられたのだ。(Aries [1960 = 1980 : 225 - 226, 296.]) それと同時に十五世紀より以前は、学生たちの日常生活は学生組合的な団体である仲間たちからなる社会ないし団体によって規制していた。それが、十五世紀以後教師による体罰や規律に代置されていた。(Aries [1960 = 1980 : 238, 247.])

第三部のテーマは「家族」である。ここでは再び図像記述の画材の歴史的変遷に着目して人びとの家族意識をたどっている。曆に描かれている絵をみると、十二世紀は仕事をテーマとしたものが中心で、登場人物は主に男性一人である。その次に女性が登場し、十五世紀には夫婦や家の男や女たちが、最後に十六世紀になって子供が登場する。そして家族的な性格を曆の図像はもつようになる。これを中世には認識されなかった家族意識の誕生の表れとアリエスは捉える。

また中世の同一の先祖から生じる系族の連帯が、近代家族の出現によって一種の家族君主制に置きかわったことにも言及している。このことは家政における妻の地位の剥奪や家の中における夫の権力の増強を招くこととなったとP. プトーを引用して述べている。

(Aries [1960 = 1980 : 318 - 341.])

次にアリエスは家族と子供の変化に伴う家族そのものの変化に目を向ける。中世ヨーロッパでは子供たちは七歳位から他人の家族へと徒弟奉公、見習修業に出され、そうやって大人の世界に日常的家族的に参加することで子供たちは経験を積み、教育されていた。それが十五世紀を起点として、家族の実体と意識の変換が起こる。それは穢れた大人の世界から無垢な子供を隔離しようという配慮、自分たちのもっと身近に子供をおき、監視しようとする親の欲求の現われである。これにより家族は中世のように友人、顧客、奉公人たちにたえず介入され世間に開かれていたものから、閉鎖的なものになった。この家族の特徴としてきょうだいのなかで子供たちを相互に平等に扱おうとする配慮や、社会に対立する孤立した親子からなる家族の全エネルギーが子供たち、ことに子供たちそれぞれの向上に費やされることなどが挙げられる。しかし、こういった近代的家族の進化は、長い間貴族やブルジョワ、富裕な職人、富裕な勤労者に限られており、十九世紀においてもなお、貧しい層においては中世的な暮らしが続き子供が親元に留まることはなかった。

(Aries [1960 = 1980 : 341 - 380.])

第三部の結論の章をみると、十七世紀までは家庭内のプライベートはほとんど存在せず、家の中は四六時中来客があり、主人も奉公人も、子供も大人も、各自がそれぞれ混じって暮らしていた。社会的に稠密であったため、家族の占める場所がなかったのである。家族というものが、生きられた実体として存在しておらず、よって家族は意識や価値としては存在していなかったのだ。それが十五世紀から十八世紀にかけて貴族やブルジョワ、職人や商人の名士たちの階層において家族意識が発生、発達した。十八世紀以後になって、

この意識はあらゆる身分に拡まっていったのだ。そして、それはいたるところで、近所づきあい、あるいは友人関係、あるいは伝統的な対人関係を犠牲にして、私的生活のプライバシーを増強していった。しかし、この変革は、社会的拘束に対する個人主義の勝利ではなく、急速な家族意識の成長の末の家族の勝利であると、アリエスは言う。(Aries [1960=1980:381-382.])

本書全体の結論を最後にすると、教育的配慮は古代人の教育(パイディア)の再出現として近世に現われる。中世においては、子供たちは母親ないしは乳母の介助のいらなくなる七歳位になるとすぐ大人たちと一緒にされ、あらゆる年代や身分の者たちを含む大共同体の一員として、日々の仕事や遊戯を共有した。こうした濃密で集合的な生活は私的生活のための場所を与えず、そうしたことから私的な生活に属する家族は道徳的かつ精神的な機能の役割を有さなかった。それが近世になると、モラリストたちは中世の無規律状態に警鐘を鳴らし、教育的配慮を子供たちに対して持つことの必要性を訴えた。そして親たちは子供たちの魂と身体形成への責任を有するものなのだとされるようになり、子の教育という親の役割規範が生れた。こうして親は子を学校へやり、彼らを大人たちの世界からひき離れた。また近代の家族は様々な身分や年齢を含む共同体を解体させた。社会全体において共通であった遊びや学校に、近世の初頭以来、選別が生じ、新しい社会では、人びとは同質の人びとからなる環境の中に、閉鎖的で親密な家族の中に、引きこもっていった。最後にアリエスは、こうして生れた家族の感情、階級の感情、そしておそらく他のところでは人種の感情は、多様性にたいする同一の不寛容さの表明として、画一性への同一の配慮の表明として出現するのである、とまとめている。(Aries [1960=1980:384-388.])

2. ヨーロッパにおける家族研究の流れ

1960年に『<子供>の誕生』は刊行されたのだが、それまでの歴史学においては「近代ヨーロッパは、「個人」と「国家」、—中略— という、二つの軸の上に成り立っていると考えられて来た」(二宮 [1983:11])。よってその中間に存在する家族には関心が薄かったのであった。また社会学においては「十九世紀以来、「家族」への強い関心を示していた —中略— しかし —中略— 少数の事例から一般的モデルをつくり上げ、それをイデオロギー的な主張の根拠とするような傾向が強すぎた」(二宮 [1983:10-11.])。そしてそこでの家族は「社会的・文化的な環境とは密接な繋がりをもたない閉ざされた構造」(Segalen [?=1987:4]) と捉えられてきた。家族研究のそのような状況の中で『<子供>の誕生』は刊行され近代家族を相対化するという新しい視点をアリエスは投じる。

それでは1970年代以後における状況はどのようなものになったのであろうか。「家族を歴史的な研究対象とする領域は、長いあいだ国家によってのみ関心を払われていたが、「家族の危機」を叫ぶ周囲の思想状況に促され、とくに民衆の経済的・社会的・文化的な歴史を掘り起こすアナール派に影響を受けて、発展を遂げたのである」(Segalen

[? = 1987 : 4 - 5.]。この歴史学の流れと平行して人口統計学においても家族研究の新たな動きがあった。その目的は「第二次大戦以前から顕著になっていた出産率の低下を懸念し、フランスにおける人口動態の変化を歴史的にみるため」、「昔はたくさん子供を産んでいた家族がなぜ産児制限するようになったのか」であった。しかし彼らのやり方では「統計グラフや変化を記すことができたが、変化の理由についての説明は得られなかった」(Segalen [? = 1987 : 5])。しかしアリエスの提示した仮説は「歴史研究が、家族や心性の歴史を中心とする方向へ向かって開花することに貢献した」(Segalen [? = 1987 : 5])。

3. 『<子供>の誕生』の評価

アリエスが『<子供>の誕生』の中でした発見は刊行された当時のフランスにおいてはそれほど「関心をもたれず、60年代のアメリカで社会学者や教育学者たちに注目され、その後でフランスの歴史学のなかでも地位を認められたのであった」(見田 [1998 : 130])。それほどアリエスの発見は歴史学のみならず、むしろ社会学者らにパラダイム転換を求めるほどのインパクトを与えた。それでは具体的にはどのような評価がなされたのか見ていくことにする。

最も『<子供>の誕生』において評価されている点は二点あって、それは「生・死・情緒・子ども・家族などの生物学的なものとは社会・文化的なものとの境界の領域でさえも歴史的に変化するという心性史の視点」、「家族を相対化し認識」した視点(宮坂 [1998 : 71])だろう。一点目の心性史の視点に関しては、それまでは人間の生物学的領域として子ども・家族は不変であるとされていたが、その家族・子どもにおける不変という部分は存在の点であって、それぞれの時代や文化における人びとの認識は変化するのだということは考察されていなかった。よって、現在自分たちの目の前に存在し、認識される子ども像や家族像がそのまま不変のものとして歴史的に存在してきたのだと固定観念化されてきてしまった。そこにアリエスの視点が入り入れられることで過去の子ども像や家族像はいかなるものであったのか再考されるようになったのと同時に、これは二点目に関わることだが、現在の家族についても過去または他の社会の家族と比較することで相対化が可能となった。現在の家族の機能とされる子の社会化や教育の役割も、また家族の情緒の安定の役割も常に家族の機能として備えられているというものではない。アリエスは現在の家族が持つ性質は「近代家族」に特有なものであるとした。この相対化の視点は、男女の性別役割分業などの家族規範を考える場合にも重要な観点であり、最も評価すべき点として挙げることができる。この他の点で評価されているものには、それまでの家族の研究に用いられなかった「歴史学者によってすでに十分利用されている資料(公証人、裁判所、教会の古文書、世帯主がつける日誌、経済的・社会的な調査、データ)」(Segalen [? = 1987 : 5])を使用した点などがある。

一方でアリエスの批判もいくつかある。アリエスの歴史の記述に関する批判のうち、肯定できるものもあれば、否定されるべきと思われるものもある。まず、アリエスの歴史の

記述に関する批判の肯定できると思われるものを見ていきたい。それらの批判とは概して歴史的事実に関する記述の誤りの指摘である。例えば「子ども服や子どもの墓が登場したのが近代であるという知見は、間違っている」(宮坂 [1998 : 71]) といったものである。歴史的事実は、その後の研究による新たな資料の発見などにより塗り替えられていくことが常であるのでアリエスに対してもそういった指摘があっても当然であろう。これに対して否定されるべき批判とは次のようなものである。それは「<家族愛>の誕生」の発見を「前近代において夫婦や親子の間に愛情が存在しなかった」(宮坂 [1998 : 70]) という誤解した解釈である。この点に関してはアリエス自身も再三『<子供>の誕生』の中で観念と愛情の混同を避けねばならないと主張している。観念とはここでは家族の有す役割や規範を指すと考えられる。また「前近代の人々にとって愛情を感じあう体験が重要ではなかったという誤解」もある。しかしアリエスの主張は「かつては情緒的な交流は、地域共同体や親族(アリエスのいう「濃密かつ熱い環境」)に、広くひらかれていたため、家族における愛情のみに高い価値が与えられる必要がなかった」(宮坂 [1998 : 70]) というものなのである。

歴史の記述に関する以外の批判もまた他方においてあった。それはアリエスが心性によって歴史を解きあかす手法そのものに対する批判である。これをみるためにはアリエスとアナル学派の関係について言及する必要がある。まず、アナル学派というのは『『経済、社会、文明—年報—』—中略—』を中心として活動している歴史家のグループに対する呼称である」(森田 [1978 : 67])。アリエスとアナル学派の共通点は「人間における肉体的側面と精神的側面の間の境界をのりこえ、生きた全体としての人間を歴史の中に求めようとする」点、「従来の歴史学では周辺的な事柄とされていた点を正面から問題にしようとし—中略—時代を生きた人々の側から歴史をとらえようとする」点が挙げられる。しかしアナル学派のとり歴史研究の方法は「蒐集された多くの個別事例と統計的数字によってあるがままの歴史を語らしめる方法」であり、アリエスのとり方法は

「現代の人間のあり方について批判的認識を出発点として、一定の仮説なりモデルをもって過去の諸事実に切りこんでゆく精神史—中略—の方法」(森田 [1978 : 71]) であった。アナル学派は心性による歴史の記述は可能であるのかという問題意識をもった。他の歴史(人口史や社会経済史など)の方が現象の説明力を持つだろうという立場をとったのである。このことについての私の見解は、アナル学派のとり方法には集められた資料を現在の文脈で読み取ってしまう危険性を感じる。その危険性を払拭するためにはアリエスの方法が有効であると考え。その時代の視点で見ることが出来て初めて他の歴史も有意味なものとなると思う。

4. 『<子供>の誕生』の再評価

最後に、この書に対する私自身の評価を試みようと思う。

今までも、アリエスが家族を相対化する視点をもたらしたことに対しては、多くの人が評価をしている。近代家族に属す役割によって、「両親の役割に歴然とした分化があらわ

れ」るようになり、「家長である父親が子供たちの教育の責任者としてその大綱を決定するとすれば、母親が受けもつのは日常的な親子関係である」(Segalen [?=1987:228-229.])と、近代家族の出現による流れとしての性別役割分業も語られるようになった。このように普遍的にその役割が存在していたのではないと言えることをアリエスのもたらした視点が可能としたことは大変な業績だと思う。しかし、このことが「女性には家事、育児が属する、男性には家族における家長としての一家を守る責任、家の中の最高決定権が属する」という性別間にある根本的枠組みを崩すことはできないのではないと思う。アリエスは『<子供>の誕生』の中で「新たな子供期の意識が出現したのであり、子供はその純真さ、優しさ、ひょうきんさのゆえに、大人にとって楽しさにくつろぎのみなもと、言わば「愛らしさ」と呼び慣わされているようなものになっているのである。これは元来は女性の、すなわち母親ないしは乳母といった、子供の世話を受け持っている女性たちの感覚である。」(Aries [1960=1980:123-124])と述べている。また近代以前においても、子どもが世話を必要としなくなるまでの期間に世話の役割を担うのはやはり「母親、乳母あるいはまた子守役」といった風に母親に育児の役割は属するものとされている。この点に関しては、「アリエスの現代の人間のあり方についての批判的認識を出発点」(森田 [1978:71])とする姿勢が貫かれていないのではないかと、議論の余地を残すところであると感ずる。

しかし、このような批判を可能とするのもまたアリエスの視点がもたらした功績だとも言え、この『<子供>の誕生』の与えた影響は大きいものだと評価できる。

参考文献

- Aries, Philippe 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime*, Plon.=1980 杉山 光信
・杉山恵美子訳、『<子供>の誕生』、みすず書房。
- Flandrin, Jean-Louis *Familles: Parente, maison, sexualite dans l'ancienne societe*= 1993 森田 伸子
・小林 亜子訳、『フランスの家族』、勁草書房。
- 石川 実 1997 『現代家族の社会学』、有斐閣。
- 櫻田 美雄 (編) 1998 『エスノメソドロジーとその周辺—平成9年度徳島大学総合科学部櫻田ゼミナール ゼミ論集—』。
- 見田 宗介・上野 千鶴子・内田 隆三・佐藤 健二・吉見 俊哉・大澤 真幸 (編)
1998 『社会学文献事典』 弘文堂。
- 宮坂 靖子 1998 「近代に勝利したのは家族である」、『家族学のみかた』: 70-71、朝日新聞社。
- 森田 伸子 1978 「新しい歴史学の試みと人口史—アリエスとアナル学派をめぐって」、『海外事情』 26-7:66-72、拓殖大学海外事情研究所。
- 二宮 宏之 1983 「歴史の中の「家」」、『家の歴史社会学』 2:9-35、新評論。
- 落合 恵美子 1994 『21世紀家族へ—家族の戦後体制の見かた・超えかた—』、有斐閣。
- Segalen, Martine 発行年不明 *Historical Anthropology of the Family*=1987 片岡 陽子ほか

訳、『家族の歴史人類学』、新評論。